

## テーマセッション6

**モデルを用いた家族看護介入  
CFAM・CFIM**

戸井間充子 山口県家族看護研究会  
大嶋満須美 山口県立中央病院

**はじめに**

家族へいかに関わるかは私たちの課題である。山口県家族看護研究会の家族看護への取り組みは1994年、国連で家族看護年が制定された年より始め、CFAM,CFIMを用いての事例は、過去10年間で100例を超える。その対象はあらゆるライフサイクルの家族であり、あらゆる健康レベルの家族である。

家族は様々な様相を呈し、個別性がある。家族の置かれている状況を察知し、それぞれの家族に焦点を当てて家族看護介入を行うことが、看護者の役割と考える。

**1. 過去の家族看護学会におけるモデルを用いた発表件数**

過去10年間、本学会においてCFAM,CFIMをもちいた演題発表数は51題あり、研究手法は口演20題、示説31題である。全体の約9.5%を占めケーススタディーにより幅広く研究が行われている。研究の場としては臨床が86%を示している。

**2. CFAM,CFIM について****1) モデルの背景**

CFAM,CFIMはシステム理論、家族療法、変化理論を基盤とし、看護者が臨床実践に取り入れやすいように考案された看護モデルであり、インタビューという技法を用いて行う。それだけに介入においてはインタビュースキルが重要となり、看護者の臨床実践能力が求められる。家族との日頃からの良好な人間関係の構築、インタビューの場の設定、コミュニケーション技術など看護者として必要な要件である。

**2) CFAM,CFIM について**

CFAMは家族の構造・発達・機能の3つの主要カテゴリーから構成され、26の下位カテゴリーに分類されているアセスメントモデルである。また、CFIMは変化を促進する領域を「認知」「感情」「行動」の3領域に分け、看護者の介入技術との適合がおきた時に家族は変化するという介入モデルである。この介入技術の適合は今後も事例を積み重ねていくことにより開発していくことが出来、このモデルの可能性を大きく広げている。

**3) インタビュースキルと治療効果**

インタビュースキルとしては ①傾聴 ②4つの円環的質問 ③賞賛・承認 ④外在化 ⑤再枠組み化 等があり、インタビューによる治療効果は ①家族が問題に気づく ②悪循環パターンより良循環パターンへの変化 ③ビリーフの変化 の3つで判定している。

**3. テーマセッションについて**

看護者として家族へのアプローチは介入の技術にあると考える。今回のテーマセッションでは、CFAM・CFIMをもちいての事例をもとに、インタビュースキルに焦点をあてたセッションを行う。(事例は当日配布)